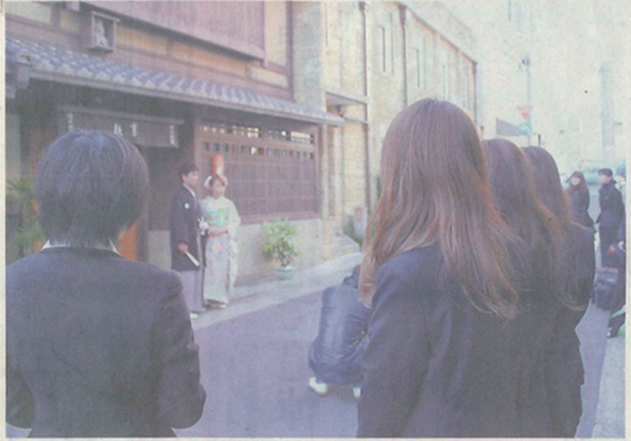
ふたりの門出 京から提案

始まりは
ここから

今や日本では、結婚式で新郎新婦がタキシードやドレスを着用したり、挙式を海外で行うなど、洋風のブライダルが当たり前になってきた。一方、結納のような和風の婚礼儀式を行う人々は減ってきている。しかし、結婚式や顔合わせの食事会だけで、新郎新婦や両親、親族同士のつながりは十分に深まるのだろうか。私たちは、京都市東山区にある麩屋「半兵衛麩（はんべえふ）」本店を舞台に、全く新しい京都ならではの和の婚礼プランづくりに挑んだ。



新郎新婦役のモデルが初々しい。プロモーション撮影を見守った。ようやくプランが具体化した（京都市東山区・半兵衛麩）

前列左から松川さん、谷澤さん、福

麩（ふ）の歴史ある店から ふうふの第一歩を

紋付きはかまと振り袖姿の新郎新婦が、半兵衛麩の玄関前でカメラにほほ笑みかけた。ことし1月17日、TNCブライダルサービスが、2月17日から発売を始めた「ふうふ仕度の儀」のプロモーション撮影を行っていた。私たちが昨年6月から進めてきた産学連携プロジェクトがようやく形となって、目の前に現れた瞬間だった。

儀式は、前撮りと指輪交換、顔合わせの三つの要素を持ち合わせたもので、文字通り新郎新婦に夫婦となる仕度をしてもらう。名称には「ふうふの第一歩を踏み出すのは、お〝ふ〟の歴史あるお店から」との意味を掛けている。

絆（きずな） 深まる流れ心掛け プラン作りに試行錯誤

プロジェクトは、従来の結納の流れや歴史を文献などで調べることから始まった。また、結納や顔合わせ食事会の現状を、京都市内のホテルや百貨店、式場に何度も足を運び調査した。

「食事会だけでは味気ない」「今の結納は形だけ。心のつながりが感じられない」「新郎新婦と友達だけの結婚式ってどうなの」。調べるうちに、こんな意見が出始めた。私たちの問題意識に共通するキーワードは「絆」だった。どうすれば確かな絆を結ぶことができるのか。試行錯誤しながらプランを練り上げていった。

儀式の始まりは、遠慮しがちな新郎新婦とその家族が打ち解けやすいよう、会話のきっかけとして半兵衛麩の店舗見学にした。式の進行とともに、出席者たちの絆が深まるよう流れを大切にした。そして、半兵衛麩の格調高く、町家ならではの落ち着いた空間が、儀式をより思い出深く演出できると、私たちは自信を深めた。

縁（えん） 起麩・祝い菓子開発 本質変えず現代風に

歓談に華を添えようと、私たちは半兵衛麩の麩を使い、縁起麩「和（なごみ）」と記念品の祝い菓子「結（ゆい）」を開発した。

当初、みそ汁に入れる麩くらいしか知らず、まず原料や作り方、歴史など基礎知識を学んだ。同業者の商品と食べ比べ、半兵衛麩の魅力やこだわりを分析した。

半兵衛麩は「不易流行」を家訓とする。この家訓を私たちは念頭に置き開発を進めたが、麩の本質は変えず、なおかつ現代のニーズに合わせて柔軟に変化させることに難しさを感じた。生クリームやジャム、チョコレートなどと麩を組み合わせ、試作を繰り返した。

「和」は、もちもちした食感の生麩を使い、縁起のいい松竹梅をかたどった。「結」は、サクサクした食感が楽しめる球状と棒状の焼き麩にチョコをコーティングしている。

同志社女子大）

❼焼き麩にチョコレートをコーティングした祝い菓子「結」

ふうふ仕度の儀　式次第

儀式は五つのイベントで構成される。締めくくりのふうふの儀を除き、各イベントの名称は漢字1字とし、その内容を表現した。

まず始めに

一

歩—あゆみ—

半兵衛麩の和洋折衷の絶妙な空間を見学しつつ、新郎新婦と家族同士が自然と歩み寄ることができる。

二

証—あかし—

京の趣を感じられる玄関前や中庭、和洋折衷の部屋で、写真撮影を行う。また、儀式全体の撮影も行う。

三

繋—つながり—

オプション。新郎新婦が指輪交換を行う。希望があれば、和紙のリングピロー（ケース）の作り方も伝える。

会話も弾む

四

和—なごみ—

出席者たちの歓談のひとときを、松竹梅やもち花をかたどった縁起麩が彩る。四季の和菓子も添えられる。

五

ふうふの儀

新郎新婦が両親への感謝の気持ちや夫婦になる決意を、麩の商品の包み紙に手書きで入れて両親に贈る。

お幸せに！

インタビュー

TNCブライダルサービス
木村俊昭社長

世界から人招き京の良さシェア

ブライダルの洋風化を受け、京の伝統文化を支えてきた職人たちの技が失われる恐れがある。職人たちが仕事を辞めず、もう少し頑張ろうって気になってほしい。そんな願いから新しい和のブライダルを企画しようと決心した。日本人が海外で挙式するように、世界中から和のブライダルを通して、京都に人を招き、京都の良さをシェアしたい。

プロジェクトを通して

時代とともに変化する伝統の魅力実感

「伝統は守るものではない。つぶしていくものだ」。プロジェクトが動きだす前、半兵衛麩の刈谷昌宏店長の言葉に、私たちは驚いた。伝統は守るものだと思っていたからだ。

活動を通して、私たちの考え方は大きく変わった。「つぶす」という言葉には、「創造する」との意味が込められているのではないか、と。伝統を受け継ごうとする意志があればこそ言える言葉だと考えるようになった。

遠い存在だった伝統文化に触れてその重みを知るとともに、時代に合わせて少しずつ変化する魅力的なものだと感じている。

京都と滋賀の大学
大学やまちの話題、社会の
などを取材し、リポートします。
学生へのメッセージをお寄せ下さい。文化報道部

Report by Stu

取材後記

今回、新聞記事を書くにあたり、自分たちの考えや思いを第三者に伝えることは容易ではなく、文字で表現することの難しさをあらためて感じた。これまでの活動を振り返り、客観的にとらえることができ、貴重な経験になった。

指導教員から

日本文化の独自性は、内外のさまざまな新しい要素を取り入れ、時代のニーズや消費スタイルに合わせて再構築する力にあります。伝統とは、実は最先端の創造活動に基づく「文化の仕掛け」だともいえます。この企画の意義は、消費者のベネフィットを実現する商品開発や、京都の伝統文化・産業の振興にとどまりません。学生たち自身が日本文化の本質を実践で学び、成長した点も大きな収穫です。今後もゼミの活動を通して「文化装置」を多角的に読み解く試みを継続してゆきます。（関口英里）

次週の担当

立命館大の学生たちが、向日市名産のタケノコの魅力をアピールします。

@キャンパス